

日本採用の新人社員が登場

— 1980年代 —

1983年、サムソンは韓国初の64KヘキロDDR AMの開発に成功した。「天然資源のない韓国が生き残るには、ハイテク事業しかない」。77年、現在の李健熙(イ・ヨンヒ)会長が、私財を投じて半導体事業を興してわずか6年。この出来事が、後のサムソン電子の中核事業を決定付けた。同じ年、日本では半導体製造装置の韓国向け輸出が始まった。これは、今日でも日本サムソンの重要な役割の一つである。

市場のような活気

75年に法人化されたサムソンジャパンは、業務の広がりとともに規模を拡大。86年には、日本での新入社員の採用を正式に開始した。日本での認知度が少しずつ高まるにつれ、アジアの懸け橋として貢献したいと、優秀な人材が会社の門をたたいた。定期採用の一期生として入社した社員は語る。



サムソンジャパンの新人社員は、韓国で研修を受けた

「数人の枠に50人以上が応募。当時の勢いはすごかった。事務所の電話は鳴りつばなして、大声を出さないと言えなかった。まるで市場のような活気がありました」

仕事へのこだわりと情熱

は、時として思わぬ方向に表れた。意見が食い違った社員が、怒鳴りあいの大ゲンカ。相手が上司であろうと後には引かない。意見のぶつかり合いは深夜に及んだこともあったという。サムソンジャパンは、今後ますます大きくなる。その期待と確信が、社員のやる気を支えていた。しかし、口論をしても数

分後にはお互いカラッと笑える明るい社風。先輩は厳しいが、公私を問わず徹底して後輩の面倒を見る。人は代わり、会社の規模は大きくなくても、アットホームな雰囲気は保たれていた。

大雨でもゴルフ場へ

李秉喆(イ・ビョン Chol)前会長は、80年代も頻繁に来日した。社員を指導する傍ら、日本企業のリーダーを訪ね、人脈を広げた。「日本のお客様を大切にしない」が口癖だった。

ある日、李前会長は顧客

とゴルフの約束をしていたが朝から大雨。部下は「今日は中止だろう」と考えていた。ところが、李前会長は出かける準備を始めた。「ここが雨でも、お客様の住む場所は晴れているかもしれない。貴重な時間を割いてくださるお客様に無駄足を踏ませてはいけません。自分よりもまず相手を思いやる気持ち。日本のパートナーとしてサムソンは少



80年代の業務風景

しずつ知名度を高め、取引先も増えていった。87年、李前会長が亡くなり、李健熙会長が就任。翌88年にはサムソン創立50周年で李会長が「第2創業」を宣言し、サムソングループの変革を訴えた。数人からスタートした日本での新入社員の正式採用も、年を追うごとに人数が増加。半導体製造装置や電子部品の取引はますます活発化し、89年にサムソン電子ジャパンが設立された。サムソンのエレクトロニクス事業を日本から懸念に支えながら、怒りつつの90年代へと突入していく。

一筆お礼まで

本号の対談取材のため、久しぶりに韓国を訪れました。ソウルは今、ひと月もたては町の様子が変わってしまうといわれるほど、変化の真っ只中にあります。日本で放映される韓流時代劇ドラマで見ると、昔ながらの路地をみると、少しほっといたします。

サムソン電子副会長の李潤雨は、サムソン電子創業当時から日本との深いご縁をいただいているひとりです。これまでの大きなご支援に感謝し、グローバル時代を生きるサムソンとして「オープンパートナーシップ」を提唱します。食事を挟んで数時間にも及んだ福島敦子さんとの対談。皆さまへの感謝と、これからのさらなる関係強化への願いが伝わりましたでしょうか。さて、今年もまた9月から「日本サムソン・ボランティアデー」が始まります。「まずやってみよう」を合言葉に全役職社

員が参加した昨年のボランティア活動では、社員一人ひとりが日本社会の一員として地域に貢献する意義を学びました。何よりボランティアは、参加する自分たちも楽しいもの。今年は意気込みもさらに高く、どんな活動が企画されるのか我々自身も楽しみにしております。活動の様子は本誌で報告させていただきます。

「サムソンからの手紙」へのご意見、ご感想を下記までお寄せください。

news letter「サムソンからの手紙」に関するお問い合わせ
日本サムソン株式会社 戦略企画室 Social Relations Team
〒106-8532 東京都港区六本木3-1-1 六本木タワーキューブ
TEL:03-6234-2047(広報直通) FAX:03-6234-2040
E-mail:pr-sjc@samsung.com URL:www.samsung.com/jp

記載されている会社名/製品名などは各社の商標または登録商標です。